

あらえびす賞

合唱曲「人間」を通して

紫波第三中学校 3年 佐藤 美結

私は、三年間特設合唱部に入り、合唱を歌うことで学校生活を充実させてきた。そして今年特設合唱部で、思い出に残る一曲に出会った。それは、片岡輝作詞、鈴木憲夫作曲、『「未来への決意」より「人間」』という曲だ。この曲は組曲で一・歴史、二・人間、三・自己、四・決意の四曲で構成されている。

この曲は、自然を大切にすること、優しさを失わないこと、互いを認め合い自分自身のこと大切にするこゝなどをやさしい言葉で語りかけた、司馬遼太郎さんのエッセイ「二十一世紀に生きる君たちへの」メッセージから生まれた合唱曲である。このエッセイは司馬さんが二十一世紀へたくした思いが熱くこめられている。この熱い思いを作詞の片岡輝さんは、四つの詩であらわしている。私達は「人間」を歌う前に、みんなで司馬遼太郎さんの「二十一世紀に生きる君達へ」を読んでみた。「司馬さんが体験できなかった二十一世紀の世界とは?」「司馬さんが描いていた二十一世紀とは?」そんな思いで全員で、エッセイを読んでみた。

この曲の中で私が特に気に入っている部分がある。それは、出だしの「むかしもいまもみらいも」という部分だ。激しい伴奏からはじまり、その伴奏に乗って歌うと、緊張感があり、これから始まる音楽のメッセージのような気持ちで歌える。この緊張感は、今まで私の中の歌の世界では感じたことのないものである。四つのパートがユニゾンで歌う難しさも感じた。今までは「同じ旋律を歌うことをあまり意識していなかったが、「音色を合わせる難しさ」を改めて感じた。

エッセイの中には「昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水と、それに土などという自然があって、人間や他の動植物、さらには微生物にいたるまでがそれに依存しつつ生きている」という文がある。異常気象の中で災害がおき、人間の力ではどうにもできない現実を目の当たりにしている。司馬さんは、「人間こそ一番偉い存在で自然へのおそれ

がうすくなった時代」と書いてあるが、まさに今だと思う。私は「人間の、自然へのすなおな態度こそ、二十一世紀への希望であり、君たちへの期待でもある」という文に心が打たれた。自然に生かされて生きていた人間によって、自然が破壊されている現代。その人間が変われば、自然と尊敬し合うことができるといふ単純な思い、かつ分かりやすい言葉だからこそ心が打たれたのである。

私は、練習を重ねていくうちに、気持ちを込めて歌うようになった。すると、エッセイで心を打たれた部分の五十三小節目から、伴奏の強弱が激しくなったり、勢いのあるものへ変化していることに気づいた。この強弱や勢いによって、人間が自然によって生かされたにも関わらず、長期にわたって自然を破壊しているという様子が伝わってくる。そして、八十二小節目からのソプラノとテノールの旋律で  $\text{♩}$  から始まる部分は、自然への畏敬の念がこめられているように感じることができた。強弱やテンポを変えて歌うことで、今、人間が生かされている様子を表現しているように丁寧に歌ってみた。この部分の伴奏では四分音符で演奏されるところがある。ゆったりとした四分音符の伴奏が静まりかえった自然のおそろしさのように、私は感じた。そして少しずつ激しい伴奏へとなる。エッセイに出てくる「二十一世紀に生きる君たちへの期待」「自然を尊敬する気持ち」を私達なりに思いを込めて表現してみた。曲の最後の部分では、「しぜんこそがふへんのかちであるということ」という歌詞がある。三回繰り返されるが、 $f$ での四部合唱でのハーモニから  $p$ 、 $gg$ のユニゾンの歌い終わりは、人間への心からのメッセージを丁寧に表現して歌うことを努力した。ささやくように歌い終わるが、 $\text{♩}$ だからこそ、司馬さんの「二十一世紀に生きる人間へ」のメッセージがあらわれていると思う。

音楽の授業では「歌を歌う時は、伴奏もその情景を表している大切なもの」と教えてもらったことがある。私は、今まで何曲もの合唱を歌ってきたが、「人間」を歌うことで伴奏の効果ということを改めて実感できた曲でもある。「怒り・苦しみ・悲しみ・いたわり・優しさ」たくさんの感情を音で表現する楽しさを体験できた私の大切な一曲となった。

私が生まれ育った紫波町は、自然豊かな場所である。この自然の中で、小

さい頃から緑に触れ、癒しをもらおう」とで、心が休まる生活を送っている。「人間」を歌っていると、紫波町の自然や風景が、変わらないでほしいという気持ちもわいてきた。

私は、これからもたくさんの方々のメッセージを伝えられる合唱、音楽を楽しみ、中学校卒業してからも音楽を愛していきたいと思う。

曲名 未来への決意より「人間」  
作曲 鈴木 憲夫  
作詞 片岡 輝

## 審査員講評

あらえびす賞感想文について

地球温暖化で世界の様子が変化している今の時代を合唱曲「人間」を歌った経験を通して自分の問題としてとらえている美結さんは素晴らしいですね。これからもたくさんの方々の音楽に触れ、自分の思いやメッセージを伝えてほしいです。

## 教育長賞

### 作曲家からの手紙

花巻市立花巻中学校 2年 福山 幸花

エドワルド・グリーグ。みなさんは、この作曲家を知っているだろうか。私はこの夏、グリーグが作曲した音楽に深くつかっていた。

グリーグはノルウェー出身の音楽家だ。北欧の美しい自然やグリーグの思いが豊かな旋律や和音から思い浮かべられる。私がグリーグの音楽にふれるきっかけになったのが吹奏楽部の夏のコンクールだ。その自由曲として抒情小曲集から「トロルドハウゲンの婚礼の日」、「昔々…」、「小人の行進」を組み合わせた楽譜をもらった。最初はグリーグという作曲者のことは知らなかった。さらに演奏することに必死で、音楽として感じる余裕はなかった。だが吹いていくごとにこの曲のすばらしさにひきこまれていった。

一曲目は、トロルドハウゲンの婚礼の日。グリーグの結婚三十周年を記念してつくられた曲だ。「抒情小曲集」の中で一番大きな作品になっており、それだけグリーグの思いが込められている曲なのだと感じとれる。一番最初は、結婚パーティーのお祝いの行進曲のようであり、グリーグや奥さん、パーティーに参加している人達が踊っている情景が思い浮かべられる。途中からはグリーグと奥さんの熱い愛が感じられる。メロディがかけ合いになっており、二人が会話をしているよう。そこから最後はパーティーの場面に戻ってくる。聴いている・演奏している私もパーティーに参加しているかのような気持ちになり、二人の愛が感じられるところが好きだ。

二曲目「昔々…」。スウェーデンの民謡の旋律が用いられている曲だ。どこかなつかしさを感じられるこの曲は明るくなったり、暗くなったりをくり返している。私が幼稚園の頃の、まだなにも人生に対して悩みがなく、その瞬間瞬間を楽しんでいた頃のことを思い出す。小さな丘で自由に駆け回っている私の昔の姿が目には浮かぶ。グリーグもそんな子供の頃を思い出しながら作曲したのではないだろうか。あるいはその頃、昔々に戻りたかったのかも。しない。

最後の曲は「小人の行進」だ。小人は、トルととも呼ばれることもある、

ノルウェーで古くから伝承されている妖精だ。トトロや七人の小人などの、キャラクターのヒントにもなったと言われている。トロールは地下で暮らしており、陽の光を浴びると石になってしまう妖精だ。この曲を聴いていると、本当にトロールが行進していくように感じる。ピアノからフォルテへ徐々に強くなっていく部分では日が暮れ、トロールが地下から地上へ続々と歩いてきているかのような臨場感がある。だが、夜明けが近づくと、地下へ帰っていくため足音は小さくなり、中間部分では、朝・昼の光や、安らぎが歌われている。そして、また日が暮れると、再び地上へ出てくる。このときのフォルテッシモは、聴いている・演奏している私が、追いかけていられるようだ。そしてもう一度ピアノになったと思うと、急にフォルテの音で最後をしめる。これは、トロールがいなくなり安心していたところで、いきなり私の目の前にトロールが飛び出してきたのかのようだ。

このように、一曲一曲にグリーグの思いが詰まっており、それがメロディ、和音の流れ、強弱の変化から読み取ることができる。私はその、一つ一つの音、一つ一つのフレーズの意味を考え、音で表現できた瞬間がとても好きだ。これはクラシック音楽にしかない良さだと思う。もちろん、他のジャンルには、そのジャンルのそれぞれの良さがある。だが、この一曲の中にこれだけの思いが音として作曲されている曲は、クラシック音楽だけではないだろうか。だから、百年以上たった現在でも、クラシック音楽は、たくさんの人々に愛され、受け継がれ、人をひきつける魅力があり、私達が演奏できている。今流行している曲は、果たして百年たった未来の日本、世界で演奏されるのだろうか。私は、今もこうして、百年以上前の音楽を演奏できることに感謝し、その音楽に込められた作曲者の思いや世界観を読み取り演奏していきたい。一つの曲を一つの手紙だと思っ

曲名	抒情小曲集「トロールハウグンの婚礼の日」 「昔々…」 「小人の行進」
作曲	エドワルド・グリーグ